

Mitsui Fudosan

三井不動産 Story

韻を踏む。
建築の世界でのそれは、
歴史と未来の接点のことだった。

北海道庁の前にちよつと変わった広場がある。
通称アカプラ、北3条広場のことだ。
周辺の再開発が始まったときにここはただの道だった。
その道の下に北海道の大切な歴史が眠っていたことを
ほとんどの人は知らなかった。

そこには実は、北海道で最古の舗装道路があった。
1924年にはここに木塊レンガが
約12万個も敷き詰められていた。

美しい道庁へつながるその道は
きつと特別な風景だったに違いない。
その歴史が新しい未来を教えてください。

北海道の大切な開拓の歴史を
未来に伝えるための広場にしよう、と。

道庁に続く風景をつくるために赤いレンガが敷き詰められた。
道にあった木々は、広場の木になると生き生きとし始めた。
新しい風が吹くと、そこにはたくさんの人が集まりはじめた。

今ではたくさんさんのイベントが行われる広場になった。
開発チームはよく「韻を踏んだ」と言った。
道庁のレンガのつくりの美しいデザインを
広場の植え込みに生かしたり、

歴史をリスペクトしてそこに込めた思いを受け止めて
新しい建築のアイデアに昇華していくことを
そう言っていた。

韻を踏む。
歴史と未来の接点が「韻」だなんて
なんだか素敵だなと思った。

いい街には、物語がある。

